

「カーン」と鐘の音が鳴り響き、線香の匂いが漂った。大切な人が旅立った。

曾祖母とは生まれたときから一緒だった。話す時は、目線を合わせてくれて、嫌なことがあってもいつも「大丈夫。」と声をかけてくれた。僕は曾祖母の柔らかい笑みと温かくてしわくちなな手が大好きだった。

僕が保育園年長の秋、曾祖母が転倒し歩けなくなった。二階で寝起きし、階段を降り降りしていたのに、一階のベッドで過ごす日が続いた。家族は心配していたが、曾祖母は「命ある限り向上心失わず」と紙に書き、笑顔でいた。僕は曾祖母の容態が分からずベッドから連れ出そうとしていたらしい。母はそんな僕を必死に止めたが、曾祖母は「元氣な証拠。」といつもの笑顔でいた。そして、僕が小学校入学前の真冬のことだった。保育園のバスで帰ってきた時、母が走ってきて「おおばあちゃんが…亡くなった。」と言った。信じられなかった。朝まで笑顔だったのになぜ…。曾祖母は「みんないい人だね。」と言い残し、亡くなったそうだ。九十二歳。笑顔だった。

葬式には、多くの親族が集まった。初めて会う親族もいた。祖父が喪主で挨拶で曾祖母について語った。その日初めて、祖父の涙を見た。ぼくはそれからも、曾祖母の部屋へ行ったが、当然曾祖母はいない。そんなある日、保育園で友達が「じいちゃん死んじゃった。」と大泣きした。その時、僕も泣いてしまった記憶がある。それまで、曾祖母が亡くなったことを認められなかったのかもしれない。

挨拶して、話して、一緒に歩いて。今こうして家族と日々過ごせることは、本当に幸せなことだと思う。

曾祖母を失ってから、七年。それでもまだ曾祖母の笑顔を忘れていない。今でも僕の心に寄り添ってくれる。辛いことがあっても、曾祖母の言葉「命ある限り向上心失わず」を思い出し、毎朝仏壇に手を合わせ、話しかけている。曾祖母は僕の心の中で生きている。